

名古屋  
山三郎  
破  
左衛門

弦本指業志紙  
五

~13  
183  
5





○徒然草小。めまもるといふ草。蛇小されたるふはしと記すと云ふも。

いぬとらるゝも。蛇小のむをたうふ串持の肉を粘飯のごとくゆら

てけくふあくものほ。度くろろくはるふ一度もまじらるゝ又

ち。うくささる煎じてのしもさる。蛇毒を解せん本文蛇の

話小はたて。偶ふひのせり中。筆のついでに記しおとる

古 仇 家 の 恩 人

爰又湯淺又平といふ。戸佐正見といふ名画人の弟子也。その才も画

道小承りたりといふも。由えわりて師の勳当をうけ。そのち正見も小栗

と筆のわがとひふよりて。勳助の才とさる。又平の漸く小栗落けぬ。

妹藤波白拍子とさる。兄とさる。ざけらる。さしも不慮小殺害され

ま。困窮しけぬ。せんさる。夫婦もろも。もろのさる。とさる

名 古 巻 巻 之 四

廿二



て近江の国ふらり大津走井のわたり小住繪をわけて往來の旅人  
 小住繪とひきく。妹が菩提のわもころかころ多分佛像と画  
 十三仏地藏菩薩のたぐひあり。そのころハ民百姓の家小住佛  
 ありて。おろくハ又平が仏繪をもとめて持仏の本尊ありけり。や  
 仏繪のふあど。浮世の人物さるぐのざれ繪ともひさける由是。浮世又平大津又  
 平ともいつり。ゆれ又生つるて吃塞言ふてありけり。吃塞言の又平ともいつり。  
 その繪と大津繪とも追分繪ともいつて時の人童あまのめづるや  
 ありし。又平が妻の名と小枝といひ。藤波が次の妹阿亀も。今ハ兄  
 又平小養どう小ありて。ひとり小住ぬ藤波ハ前つ年佐良三ハ郎が  
 為小罪ありて殺されなむ。又平何を三ハ郎と一太刀恨て妹を修羅  
 の宿恨をまじしほふさんと日來るるめるといふも。三ハ郎出奔のち

弗小きく入あれが。むちりく月日とごりぬ初め年春菱浪が  
 祥月命日小あさる日妻小枝妹阿亀もがまらふ。縣神子と  
 やら。菱浪が口とよせて冥途のたづとととぬまて降巫上坐小居るあり  
 て目うへの人や目下よ。生口とたぐや。小枝ともいつて目下の  
 者あて外口ありころ。櫛の葉あて水ひけられ。巫ハさやちるらと  
 弦を打あして。且神保ととと入ける  
 丈ほし敬てまじし。上ハ梵天帝釈四天王下ハ閻魔法王。  
 五道冥官天の神地の神家の内ハ井の神。電の神伊弉方の国  
 小住天照皇大神宮外宮ハ四十未社内宮ハ八十未社。兩の宮  
 風の宮。日讀日讀の御神当国の靈社ハ坂本山王大権現。膽吹  
 神社多賀明神竹生島辨才天。築麻耨明神田村の社。日本六十









藤波がびふ  
うかしやうの  
亡魂梓の  
引小  
ひくれ  
来る

き世又平

毒

茶



殿のおん妻あろうくみひりづる。おん身ら侍夫婦妹をじといひなむ。又平  
 八目ととりあふ。さげば同ちど不便あり。まづこれ我をさつぐとて。千辛  
 万苦のともうちふ。たぬく少一の福を得て。さひあやう。殿ふめでと。その  
 身の出世とあふ間もあく。不慮の枉死とあう。たゞ心の残るも理之やめて  
 敵となづぬい。仇とむいて修羅の宿恨をさ。ささげば。くく  
 仏果を得て悪趣とまぬぬれ。念珠をりあじ。南无阿弥陀仏あま  
 仏と。とつる声も吃塞。い。哀れぞまきりけり。玉又いひけり。そのあやせ  
 こそ我身少の讀経おまきり功德たれ。ばうへのお情。仇とむいてたび  
 あく情るは。こどもで手向たぬけし飯菜も。み。た鳥ふまなげ。と  
 妾がもふと。く。飢ふた。餓鬼の飯。炎とるりて消失ぬ。ぬぐ  
 いみされ鳥と。け。た。ぬ。ぐ。た。の。り。づ。ぞ。じ。あ。ま。名。残。と。詰。り。た。さ

こといひた。こと数あ。あ。り。て。尽。ぬ。も。黄泉の使。あ。げ。ぬ。い。を。や。い。ぬ。や。を  
 ぞと。い。ひ。お。り。て。巫。目。と。い。ひ。た。瘳。と。扱。て。居。り。けり。又。平。米。錢。を。さ。り。て  
 与へ。その。旁。を。謝。し。け。り。巫。へ。これ。と。う。け。と。ま。あ。つ。れ。と。告。て。ま。り。り。の。ら。  
 扱。小。枝。へ。今。宵。の。仏。子。供。び。ん。と。高。木。へ。餅。買。お。立。出。と。い。ふ。阿。龜。は。あ。ま。と。こ。か  
 ぬ。ぐ。ひ。の。ひ。も。ふ。香。を。盛。て。手。向。を。や。と。奥。の。つ。て。又。平。独。ら。ふ。の。ら。手。と  
 こ。ぬ。ぬ。に。て。居。り。けり。頃。も。弥。生。の。ま。ら。め。て。堅。田。ふ。お。つ。る。雁。金。も。  
 ろ。ぢ。ふ。飯。る。時。る。ふ。比。良。の。高。嶺。の。雪。お。ろ。し。餘。寒。を。ま。し。て。肌。さ。じ。  
 瀬。田。ふ。お。つ。く。日。の。ゆ。げ。も。西。方。浄。土。と。ろ。め。辛。崎。の。松。風。も。常。樂。我  
 浄。と。ま。さ。り。栗。津。の。嵐。を。世。中。の。生。者。必。滅。と。觀。が。ゆ。ば。矢。早。  
 瀬。の。船。も。人。の。身。の。會。者。定。離。と。ぞ。い。ふ。石。山。の。月。三。井。の。鐘。生  
 死。長。夜。の。夢。の。世。を。悟。る。人。外。の。方。ふ。鉦。の。音。念。仏。の。声。い。し。も









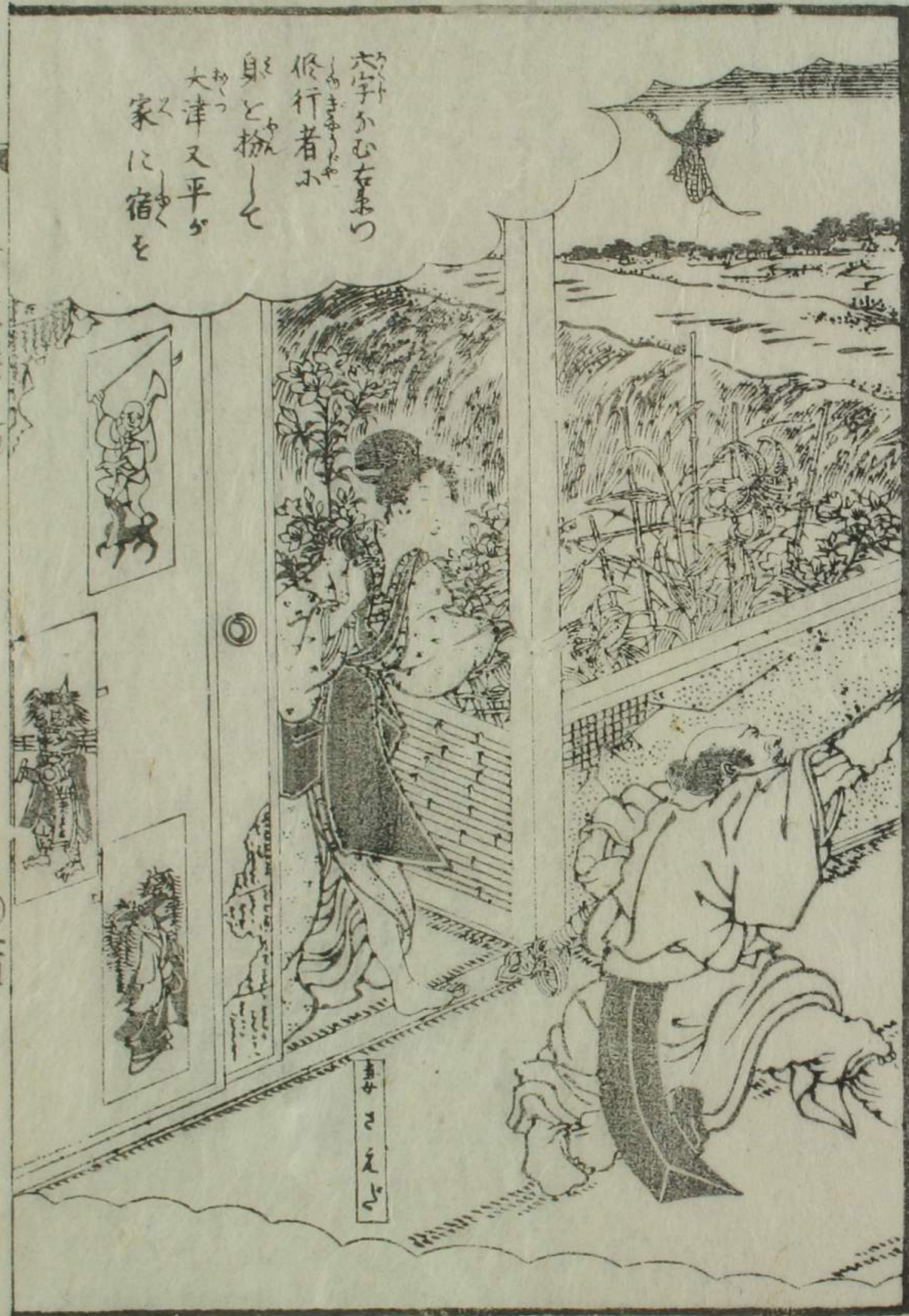


うふ心せけが。ものりつとあつらふと唯口指さして氣といつを傍より  
 於竜又とて丹ととさなる血と筆ととりて与つ目ば。又平らぬとら。机の  
 上ふものゆくと。あむ右衛門読んでせいの。ちんぢ六年以前長谷部雲六と  
 せんりふ者といひ合せ佐々木の家宝百蟹の絵巻物と奪取するの  
 ろど。菘浪を害して逃去なる大罪人いそぎ及あん。それじら則  
 是菘浪が兄湯浅又平といふ者あり。汝と打て妹が冥途の病恨とをじ  
 せん之日来心めけたれども弗ふくへあれざぬば。むほく月日と地らつる  
 小。今月今日妹が祥月命日ふらぐらあひら因果のめぐる車の輪妹が登  
 び、所あらべ。犹豫せよ比奥あり。靦面の悪報妹の敵のめぬ所を  
 ちや勝負と決せよと昏かり。うらび刀とさうるゆして只一歩とさうつ  
 じば。あむ右衛門あむおらといふべあれども。それじがめのめぐる子細と一

通りらしてよとてあやうけらあびしつあいらひけり。あむ折しも又平が妻  
 小枝餅とゆらめて立ちつり。何夏やんとあびく門ふたぎとて内の様子  
 どうゆひけが。又平がのたまりあつらふと。いをばく声かけて走り余  
 の手ふまぎらて押さめり。かひておんがふものめら。うらむらめらあひて  
 大恩とあつらんと日來心ふ忘れざる恩人ハ則ばおんさあせおのさあう  
 といふあぞ。又平大ふおどらた。扱はさうとさあうらとて手とさめてを坐  
 居らる。あむ右衛門のうらうら。小枝がわををつくくぬぬば。いさぬえおん  
 あり女あり。小枝ハあむ右衛門が前ふ恭しく手とほき。さてもふひうけ  
 ほど。うらびおん目おめらうれいさ。妻とて六年以前。あむあうも今月  
 今夜京北山の杉坂あて首縊て死せんとせと。金二十両なぬり。危き一命  
 とさうひらぬぬれ。その女あて。則とさうら。又平が妻小枝とやと丸のあてぬ。



大津又平が  
 家に宿を  
 取と檢して  
 修行者小  
 六字かむを某の  
 修行者小



大津又平の宿

七五

きさえと



うき世又平

かじろん

大津又平の宿







思とあつざる者となり恩とあひておぢい味が冥途の恨  
 らぬをの思とは仇とつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 けり恩とみて仇おつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 つづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 某若浪どのを殺せしは全く非義非道ふのどふれ物語を聞て  
 若殿桂之助どの在京の刺若浪どのを艶色に迷ひ不破伴左  
 衛門がたづひの倭臣等ふとめられて放佚無軌の不行跡漸々不  
 破のこ名古屋山三郎と某をく諫となせよつづれつづれつづれ  
 ももちひむつと若室町御所の御早ふつづれつづれつづれつづれ  
 若浪どんとつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 若浪どつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 権不破道犬が心底おつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 あつてつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 妻子と異してその夜館と立退けるが松坂ふておつづれつづれ  
 せつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 女浪どつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 兄あつてつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 のち丹波の国ふるつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 巻物と奪つづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 子あつてつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 改つづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ

若浪どつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 権不破道犬が心底おつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 あつてつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 妻子と異してその夜館と立退けるが松坂ふておつづれつづれ  
 せつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 女浪どつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 兄あつてつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 のち丹波の国ふるつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 巻物と奪つづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 子あつてつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ  
 改つづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれつづれ







と同ほくをといひつ。立せり人ハ乃是別人ハありど。佐々木桂之助国  
 知あり。あま右衛門掾のそしを退けて平伏せぬ。桂之助ひき  
 ハ我倭者の為ハとあらむそ行と乱。汝等が諫言以りうひと。  
 今もわが波浪が非業の死へ畢竟我手成さじて殺せしも同然あり  
 我眼ありあま。誠の忠臣とてあまの百蟹の巻物を奪し  
 も汝が仕業と名ひん。大方誤りなり。今汝がわががうとさけハ振  
 ガ孝行あり。巻物とりて出。文弥々忠義ありて月若も忌  
 ちれぬ。なむひすれり者どもが不便なる方の果さるハ悲歎ハせ  
 せりぞり。我不行跡ありて父の勳氣とわうし。かく漂泊の身  
 とありて今後悔とといひも。更みひる。いれちて恥とのこ  
 さんして自殺せりと名ひしと云。なむぐちれども。道大謀計

館の騒動とあのみさげバ父うへのおん身の人氣づゑ。時節ハ  
 まち。御勳氣のゆきとけり。家とおそろんとさふ。おち  
 ちら瓜妻のびて。ひるく月日とわたりつ。比家のあまじ又平。波浪  
 ち急ハ零落せしと憐。深くのりてひひおちぬ。なむや山三  
 郎不破伴左衛門がなめ父とあまなるまも。わが僕様二郎と  
 いふ者ハあひてくくさぬといひけぬ。あま右衛門頭とさげ。おん  
 氣づいあそはるぬ。某命あまの道犬が悪意と乱し。  
 再世ハいづし。まわるとを。桂之助と名たのめ。く  
 どとひける。折しも空中。一羽の鷹片田ハ落る。鷹さすて  
 椽さねハ撲地あり。あま右衛門。膝小ちり。再飛んと羽たるとこれ  
 とも。飛ことあまの。うりく。足ハ財布とあいつけたる。足は







